

## と畜搬入豚のレプトスピラ浸潤状況

森松 清美<sup>1)</sup>、徳永 貢一郎<sup>1)</sup>、高橋 公代<sup>1)</sup>、田尻 幸子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>愛媛県食肉衛検、<sup>2)</sup>内子家畜診療所

1. はじめに：豚のレプトスピラ症は、妊娠豚で早死産を引き起こし、それ以外の豚では明らかな臨床症状を示さず保菌豚となり、農場を継続的に汚染する原因となる。愛媛県では一部地域での抗体保有状況調査が実施されているが、診断までに長時間を要することなどから、県内全域を対象とした調査は実施されていない。今回、県下一円の農場から搬入された豚を対象として、レプトスピラの浸潤状況を調査し、本調査に基づく指導により農場での疾病対策が行われた事例について、その概要を報告する。

2. 材料及び方法：2009年5月から2010年6月にと畜場に搬入された豚210頭、19農場の腎臓乳剤および尿を採取し、農場ごとに5頭分をプールした42検体を用いてNested PCRによるレプトスピラ flaB 遺伝子検出を行った。検体は、High Pure PCR Template Preparation Kit (Roche Diagnostics) を用いて核酸を抽出し、Nested PCR は、1stPCR は国立感染症研究所レプトスピラ症検査マニュアルに、2ndPCR は新田ら（沖縄県家衛試）の方法に準じた。1stPCR で flaB 遺伝子が検出された場合は、Kawabata らによる制限酵素断片長多型解析を行った。

3. 結果：検体の陽性率は、42検体中13検体から遺伝子が検出され30.9%であった。農場別の陽性率は、19農場中7農場から遺伝子が検出され36.8%であった。地域別の陽性農場は、南予4農場、中予1農場および東予2農場であった。そのうちの2農場では1stPCR で遺伝子が検出され、遺伝子型別はIa型に分類された。これらの農場では、早産が散発していたためレプトスピラ感染を疑い鼠族対策および抗生剤の全頭投与が実施され、その後の調査で遺伝子は検出されなかった。

4. 考察：レプトスピラの浸潤状況は、全国的な血清学的調査では10.9%であり、青森から鹿児島に到るまで広域で認められたと報告されている。愛媛県内での浸潤状況は、農場別では36.8%であり、南予、中予および東予すべての地域でみられ、県内でも広く浸潤していると思われた。今後、豚の早死産が発生した場合、県内全域においてレプトスピラの検査を考慮する必要があると思われた。また、農場でのレプトスピラ症の清浄化は、当所の直接的指導の成果と考えられた。